

生涯、住み続けられる住宅を！

要介護になっても、認知症になっても

自宅で最期を迎えられる可変住宅の設計

開発の内容

商品・サービスの内容

高齢期のライフステージ変化や生活シーンに合わせて変化する住宅空間。

- ライフステージ・生活シーンに応じて変化する住宅の設計指針。
- 症状や介護状況の多様なニーズに応じた、住宅のコンサル設計指針。

(例)



軽度認知症の夫を介護する妻。
寝室を同室として見守るが、介護ストレスがたまる。昼間も寝室に閉じこもりがちな夫。



フレキシブルな間取りの住まい
妻の寝室を隣室に移動。訪問介護を導入し、ヘルパーは家事をしつつ、自然に見守り。



娘夫婦と孫の訪問。
引き戸を全開に、思い思いの場所ですごす。妻と娘も、自然に夫と孫を見守り。

ターゲットユーザー

30代・40代での一次取得者の住宅、50代・60代での住宅建替え・リフォーム
(将来、親世代や自身の介護期に対応できる住宅)

ユーザーベネフィット

介護状態に合わせて変化し、住み慣れた自宅で長くくらすことができる。

- ・見守り・見守られやすい住空間： 高齢者と寄添う人の適度な距離感
- ・介護負担を軽減する住空間： 外部介護サービスの受入れやすさ

差別化のポイント

- ・軽度認知症の対策に、住空間でアプローチ
- ・間仕切手法のバリエーション展開による、多様なニーズへの対応力

成果

京都市内の小規模多機能型居宅介護施設3拠点で実装実験で効果を検証

- ①右京区 welcomeやまの家
- ②上京区 十四軒町の家
- ③北区 きたおおじ

